

Title	ルードルフ・ヒルファディングの伝記的新資料
Sub Title	New biographical materials on Rudolf Hilferding
Author	倉田, 稔
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1972
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.65, No.10 (1972. 10) ,p.674(54)- 680(60)
JaLC DOI	10.14991/001.19721001-0054
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19721001-0054">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19721001-0054</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ルードルフ・ヒルファディングの伝記的新資料

倉田 稔

- §1. 生いたち
- §2. ギムナジウム, 学生社会主義者同盟, 大学, 卒業
- §3. ヒルファディングの K. カウツキーあて手紙から
- §4. ヒルファディングの夫人たち
- §5. 彼の死について
- §6. (附録)
- 附録 1. アムステルダム社会史国際研究所蔵, レオン・トロツキーのヒルファディングあての手紙(目録)
- 附録 2. フリードリヒ・エーベルト研究所蔵, ヒルファディングの手紙(目録)

本稿は、ルードルフ・ヒルファディングの伝記的研究、に関する、若干の論争的又は事実誤認に基づく諸点を示し、資料上の訂正と、合わせていくつかの新資料の紹介(目録)を行いたい。

§1. 生いたち

ヒルファディングの父親は、Emil Hilferding とい(1)い、1852年7月17日生れのユダヤ人であって、恐らくウィーンへ移り住んで来たと思われる。彼は、同じユダヤ人の Anna Liss という婦人と結婚し、2児をもうけた。1877年8月11日に生れた男児が Rudolf

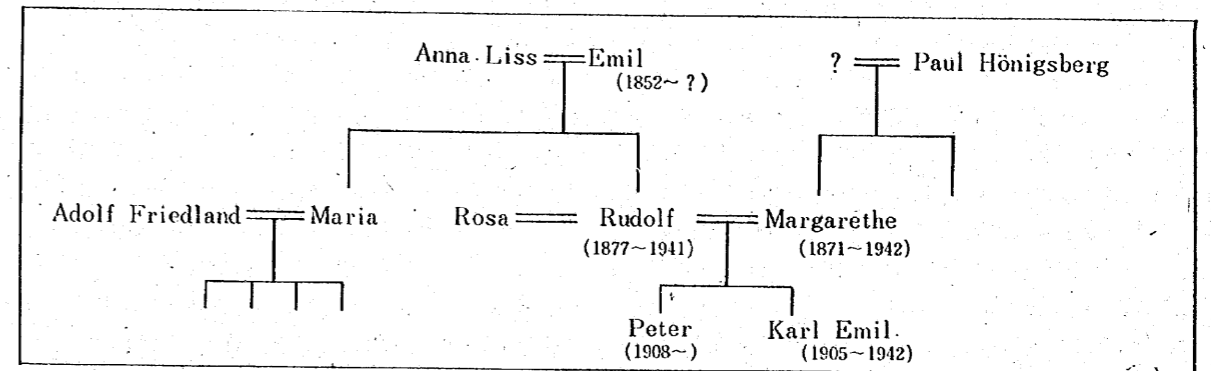
Hilferding であり、彼の妹は、Maria と名付けられた。ルードルフの出生地は、Israelitische Kultusgemeinde, Wien I, Schottenring 25 である。(3)

ルードルフの出身階級は、ヨーロッパでは、誤って伝えられた。はじめに説を出したのは、Alexander Stein で、彼は、Rudolf Hilferding が「富裕なユダヤの商人の家庭」に生れた、と書いた。Wilfried Gottschalch も近年その説を受け継ぎ、これがルードルフの出身についての定説になった。(4)(5)

ところが、この定説を打破る第一の意見が現われた。Yvon Bourdet は、„Das Finanzkapital“ の仏訳 Le Capital Financier. Traduit par de L'allemand par Marcel Ollivier, Paris 1970 へ付した序文の中で、Rudolf の父が、「ある保険会社の勤め人」であった、と述べた。(6) ルードルフは、ウィーン大学医学部入学の際の学籍簿の欄に、父が Beamter であると記入している。Peter Milford 氏も、彼の祖父、即ち、ルードルフの父が、a higher employee であったと筆者に語った。また、ルードルフは、彼の結婚登録簿の中で、父が Privatbeamter である、とより限定しているし、決定的な事は、同じ登録簿の中で彼の父が Hauptkassier der „Allianz“ であると書き込んだのである。「アリアンツ」というのは、ある古いイタリア系の保険会社である。(7)(8)

- 注(1) Wien Rathaus, Magistratsabteilung における筆者の調べ。
- (2) その推定理由は、Magistratsabteilung には、Emil Hilferding の戸籍が殆んど存在しないからである。しかし、今後の資料の出現によっては、結論の異なる可能性がある。
- (3) Magistratsabteilung が筆者の為に作成して下さった、タイプ紙より。
- (4) A. Stein, Rudolf Hilferding und die deutsche Arbeiterbewegung. Hamburg 1946. S. 6.
- (5) W. Gottschalch, Strukturveränderungen der Gesellschaft und politisches Handeln in der Lehre von Rudolf Hilferding, Berlin 1962. S. 13.
- (6) Le capital financier, p. 19.
- (7) Wien Universität, Universität Archiv 所蔵, Nationale. (ルードルフ・ヒルファディングの学籍簿)
- (8) Rudolf Hilferding と彼の最初の妻 Margarethe の第2子、Peter Friedrich Hilferding の現在の名。筆者は、1971年秋、欧州留学中、ウィーンで氏と面談した。

ヒルファディングの家系図は次のようになる。



以上の事から、ルードルフの父がかつて「ある古いイタリア系の保険会社の会計主任」であったことが判明するであろう。従って、ヨーロッパでの従来の定説は誤りであり、ルードルフは社会的に表現すれば、旧中間層の出身ではなく、新中間層の出身であった。

§2. ギムナジウム, 学生社会主義者同盟, 大学, 卒業

ルードルフの入学したギムナジウムは、ウィーン第2区、国立ギムナジウムであり、彼がここを修了したのは、1894年9月21日である。この日付は重要である。なぜなら、ヒルファディングが、ウィーンの「学生社会主義者同盟」に、ギムナジウムの時代に入ったことを知らせてくれるからである。(9)

ヒルファディングは、15歳頃社会主義に興味をもった、と言われていたが、事実はもう少し具体的である。なぜなら、彼は、ギムナジウム時代に、そしてその卒業の一年半、15歳8ヶ月前後の年齢の時に、「学生社会主義者同盟」に加入した。カール・レンナーは、ルードルフらが、1893年の初春、ここに加盟したこと

を書いている。(14) 相当早熟であったと思われる。ルードルフは、ギムナジウム修了後直ぐ、ウィーン大学医学部に入学した。彼の目的は医者になることであつた。彼は、6年半、医学部に在学し、1901年3月27日に、医学博士にプロモートされた。在学中は、殆んどあらゆる医学分野を学び、社会科学系の課目は、2つしか履習していないので、マルクス主義研究は、「学生社会主義者同盟」の内部と独学によるもの、と考えられる。その上、当時の大学ではマルクス主義そのものは教えられていなかった。学生時代の社会科学上の論文は、一編フランス語に訳されて、有名な Le mouvement socialiste, に載ったので、この時から、全くの無名というわけではなくなった。また、在学中には、「学生社会主義者同盟」の首領になった。(15)(16) 医学博士となって卒業したルードルフは、早速一般開業医になった。Lutz Graf Schwerin von Krosigk の言及から、Gottschalch は、ヒルファディングは小児科医であると書いたが、これは誤りである。又、少なくとも当時は、大学医学部を卒業すると殆んど、一般開業医になった。ルードルフも自ら「開業医」としており、特に小児科と規定していない。(17)(18)(19)(20)(21)

- 注(9) Wien Rathaus, Magistratsabteilung 所蔵, Rudolf と Margarethe との結婚の登録簿。
- (10) Dr. Peter Milford 氏, 筆者に語る。
- (11) Wien Univ., Universität Archiv, Nationale.
- (12) Johann Fischart, Neue Köpfe, Das alte und das neue System, 4. Folge, Berlin 1925.
- (13) Karl Renner (1870-1950) オーストリアの社会民主主義者, 後の共和国首相。
- (14) Renner, An der Wende zweier Zeiten. Bd. I. 2. Aufl., Wien & Zürich. 1946. S. 250.
- (15) Wien Univ. 作成, 卒業者名簿から。
- (16) 注(7) 参照。
- (17) L'inspection du Travail en Autriche, in: Le mouvement socialiste, N° 13, 15 Jul. 1899, pp. 101-111.
- (18) 注(10) 参照。
- (19) von Krosigk, Es geschah in Deutschland, Tübingen 1951, S. 80.
- (20) Gottschalch, op. cit., S. 14.
- (21) Wien Rathaus, Magistratsabt. 結婚登録簿。

§3. ヒルファディングの K. カウツキーあての手紙から

ヒルファディングは、事実上、「ベーム＝バヴェルクのマルクス批判」(1904)でデビューしたが、彼は既にその2年前、1902年にはその原稿を書き上げていた。

ヒルファディングのカウツキーあて、はじめての手紙(1902年4月23日付)と共に、ヒルファディングは、この原稿を、カウツキーに送付し、『ノイエ・ツァイト』に載せてくれるよう、頼んだ。この時には、大学医学部を既に卒業していた。ところが、この論文に対して、カウツキーから来た返事は、「色よい返事」ではなかった。カウツキーは、『ノイエ・ツァイト』への掲載を拒絶したのである。その為、ルードルフは、マックス・アドラーらと相談して、『マルクス・シュトゥディエン』を発行することとして、1904年の第一巻で、やっと世に送り出した。

ヒルファディングが、自分の新しい経済学、既に、独占資本主義の時代に適用したマルクス主義理論の完成を目指して、研究を進め始めるが、その書物のタイトルが1905年5月27日付の手紙で、少くとも決められていたことが分る。「私は再び仕事にとりかかれます。私は今、私の金融資本に、まだタイトル以上にはそこにありませんが、とうとう着手したい。」と、そこでは述べている。ただし、研究は進めていたが、叙述の開始は、この希望にもかかわらず、半年おくれた模様である。

注(22) この手紙の目録は、拙稿「アムステルダム社会史国際研究所蔵、ヒルファディングの未発表手紙(目録)」(日本社会事業大学研究紀要、第19集所収)を参照願いたい。

この手紙の紹介をされたのは、長坂聡氏「ヒルファディングのカウツキーあての手紙」(『唯物史観』河出書房、1967年、Vol. 5、所収)である。(以下長坂氏論文と略称。)

(23) Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis (以下 IISG と略称)、Kautsky Archiv KDXII 580.

(24) ルードルフの大学卒業は、前述の如く1901年3月27日である。長坂氏論文では、「医学部の学生であった。」(97ページ)とあるが、実際は、卒業後である。なぜなら、Wien Univ. 卒業者名簿には、ルードルフは、再入学していない。

(25) 長坂論文、97ページ。

(26) IISG. KDXII 581. Mai 21. 1902. より判明する。

(27) IISG. KDXII 590. なおその上、1905年8月28日付手紙でも、10月24日付手紙でも「私の金融資本」と呼んでいる。長坂氏論文では、第19信(1905年12月18日付)で、はじめて、製作中の著書を「私の金融資本」と呼んだ、とされている。

(28) IISG, KDXII 598.

(29) 原語通り。

(30) IISG, KDXII 583.

(31) 長坂氏論文 99 ページ。

(32) IISG. KDXII 585.

1905年12月18日手紙では、「あなたのおっしゃることは、しごくもつとです。しかし今は、理論的な事柄を書くことは、Praxisが華々しく前進している場合には非常に困難です。そして私はそれ以外に私の金融資本を持っています。」という書き出しの手紙を書いた。このPraxisが問題である。これは、長坂論文の言う、カルテルや集中の「実際」ではない。ルードルフ自ら「それ以外に私の金融資本を持って」、というように、金融資本に関する理論以外のものである。その答えは、1905年の第1次ロシア革命から、国際社会主義運動に持ち込まれた、マッセンス・ストライキ問題であり、そのPraxis(実践)である。

ルードルフは、すでに1903年『ゼネラル・ストライクの問題によせて』を書き、1905年には『議会主義とマッセンス・ストライキ』を送り出した。彼のストライキ論は、後のドイツ社会民主党中央の理論に殆んど同一の見解となっていた。ルードルフは、後者の論文を書き上げてから、マッセンス・ストライキの実践が前進しているので、一応ここでその研究をやめるのである。

長坂氏は、1903年9月7日付の第四信で、ルードルフが、「ゼネラル・ストライキにかんする仕事を続ける気はない」と書いていると言われるが、全く同じ手紙の中で「私はゼネラル・ストライキが可能である諸条件の研究をしたくてたまりません。」と述べている。その上、それを、1905年の論文で発展させたのである。

同1903年12月20日付の手紙では、ゼネラル・スト

イキをたっぶり論じている。以上から、分ることは、1903年から1905年まで、ルードルフは、ゼネラル・ストライキ、またはその発展した形であるマッセンス・ストライキについて関心をそそいでいて、やむことはなかったのである。

ルードルフが、1905年の華々しく前進している実践の前に小休止をしたのに対して、その実践そのものの経験を理論的に吸収しようとしたのが他ならぬローザ・ルクセンブルク夫人であった。彼女のマッセンス・ストライキ論の優れた点はそこにあった。

1905年3月10日付の手紙には、幾つかの興味ある事が書き記されているが、その中に、彼が、当時研究していた経済的問題の一つ、取引所について、カウツキーに質問するくだりがある。これは、当時のマルクス経済学者の関心をひいた問題の一つで、発端は次の事だった。

カール・カウツキーは、エンゲルスの死の直後、エンゲルスの手紙の一部を発表して、エンゲルスがカウツキーに、カール・マルクスの『資本』への補遺の原稿を『ノイエ・ツァイト』に送る、といった事を紹介した。ところが、エンゲルスは、原稿を送る前に死んだ。エンゲルスの予定によれば、はじめが「価値法則と利潤率」、つづいて「取引所」の研究が送られる、というのであった。

この紹介記事が出たために、エンゲルスの遺稿相続人の一人であるベルンシュタインは、何らかの発表をしなければならなくなった。彼は、エンゲルスの論文「価値法則と利潤率」を『ノイエ・ツァイト』に発表した。しかし、「取引所」は発表しなかった。そして、エンゲルスは、「取引所」に関する研究を一体行なったのか、行なわなかったか、分らない、曖昧模糊とした発言をしたのである。

ヒルファディングは、そのため、次のようにカウツキーに質問した。

「私はさらに、取引所にかんするエンゲルスの草稿について、あなたが何も御存知ないかどうかをたずねたかったのです。というのは、これはじつは、エンゲルスがその晩年にこのような研究(Arbeit)をしていたのかどうか、という疑問と同じだからです。」

ヒルファディングが疑問としたことについては、周知のように、エンゲルスが、「取引所」の研究を試み(又はその計画を考え)、それは、断片ではあるが残っているし、1933年にはじめて公表された。

長坂氏論文では、「エンゲルスがその晩年にこのような仕事(取引所にかんする仕事—筆者(=長坂氏))をしていたのかどうか、……」(101ページ)とされているが、これは「研究」としないとはっきりしないであろう。

また、要するに、1933年まで、ベルンシュタインをのぞけば、誰もこの断片を見ることが出来なかったわけであり、それ故、「金融資本論」における、ヒルファディングの取引所にかんする理論は、独自に打ち立てられたもので、エンゲルスの断片からの影響はない。論旨が似ているからという点で、ヒルファディングの取引所論をエンゲルスから引き出された議論、とするのは、文献上から、絶対ありえないことである。

§4. ヒルファディングの夫人たち

マルガレーテ・ヘーニクスベルク Margarethe Hönigsberg は、1871年6月20日生れで、ルードルフより6歳年長である。彼女は、ルードルフと同じ、Israelitische Kultusgemeinde, Wien I, Schottenring 25 に生れた。彼女の父は、ドクトル・ポール・ヘーニクスベルク Dr. Paul Hönigsberg といい、開業医で、後に、ウィーン第一区、ホーエルマルクト10番地に住んでいた。マルガレーテもウィーン大学出の女医で、開業医となった。

ルードルフとマルガレーテの2人の愛は、社会民主

注(33) R. Luxemburg, Massenstreik, Partei und Gewerkschaften, Petersburg 1906.

(34) IISG, KDXII 599.

(35) [K. Kautsky], Aus den Letzten Briefen von Friedrich Engels. in: Neue Zeit. Jg. 20. 1894/95. Bd. 2., Nr. 47.

(36) E[duard] B[ernstein], in: Neue Zeit, 1895/96. Bd. I. Nr. 1, u. 2.

(37) 註 34 の手紙。

(38) Das Kapital. Bd. III. Volksausgabe. Besorgt vom Marx-Engels-Lenin-Institut, Moskau. Verlag für Literatur und Politik Ring-Verlag A. G. Zürich 1933. (Bd. I v. II. は Wien-Berlin) これ以降の諸版には、「取引所」は入るようになった。

(39) D. K. Fieldhouse, The Theory of Capitalist Imperialism. London 1967.

(40) Wien Rathaus, Magistratsabteilung より。Margarethe は Margaret と書いている場合もある。

(41) Dr. Peter Milford 氏、筆者に語る。

主義運動の中で成長し、彼等は1904年5月9日に結婚した。時にルードルフ26歳、マルガレーテ32歳で、共に結婚登録簿の宗教の欄に「無宗教」と記入している。

彼女は、「顕著な個性」を持っていたと言われ、「強い科学的な、著述家的傾向を現わした。」彼女は、夫ルードルフと共に、『ノイエ・ツァイト』にいつも寄稿するようになった。勿論経済学ではなく、より「社会立法と社会医療の諸問題」についてであった。

マルガレーテは、1905年9月12日に、第1子、Karl Emil Hilferding を生んだ。Karl は、ルードルフが最も尊敬した人物 Karl Heinrich Marx の名にちなんで付けたものである。セカンド・ネームは、ルードルフの父 Emil の名である。

ルードルフは、『ノイエ・ツァイト』上に多くの政治論文を書いたが、最愛の息子の名、Karl Emil を用いてそのペン・ネームとした。この時、Wien II, Lichtensteinstrasse 30 番地に住んでいた。

第2子、Peter Friedrich Hilferding は、1908年1月21日に、ベルリンのシェーネベルク・ルーベンスシュトラーセ19番地で生れた。従って、ルードルフのベルリン行き以後のことである。

ヒルファディングは、しかし、彼女と、後に離婚した。ベルリンで、恐らく、1922~3年頃、ローザという婦人と結婚した。ヒルファディングが、何故マルガレーテと離婚したかは分らないが、一つは、第一次世界戦争に彼がハプスブルク帝国の軍医として従軍したこと、そして終戦後、党の命令で Freiheit の編集長となるべく、ベルリンへ再び行き、そこに新しい女性ローザが出現した事であろう。ローザ・ヒルファディング夫人については、余り知られていないが、ドイツ出身で、ドクター位を持っている。この為マルガレーテは、ルードルフと永久に別れたのである。

マルガレーテ・ヒルファディングは、ルードルフと別れて以来、ウィーンに住んでいた。彼女の著書は、

- 注(42) Wien Rathaus, Magistratsabt. 所蔵、結婚登録簿。  
 (43) Dr. Peter Milford 氏、筆者に語る。  
 (44) A. Stein, op. cit., S. 5.  
 (45) Karl Emil Hilferding の Geburtschein より、Dr. Peter Milford 氏所蔵、筆者に贈られたコピーより。  
 (46) 注(43)  
 (47) Peter F. Hilferding (Dr. Peter Milford) 氏の Geburtsurkunde 同氏所蔵、筆者へのコピーより。  
 (48) Margarethe Hilferding, Geburtsregelung, Wien 1926.  
 (49) Karte von Karl E. Hilferding an Karl Kautsky, IISG, Kautsky Archiv KDXII 573.  
 (50) 注(43)  
 (51) Rathaus Magistratsabt. による結婚登録簿への補遺。  
 (52) 大島清「ヒルファディング」経済学説全集、第8巻、河出書房、1956、98-99 ページをも参照。

『産児制限』ウィーン1926年、である。1930年2月6日に息子 Karl が、ウィーン大学で、哲学のドクトルにプロモートされた。しかし、平和な生活も、ナチズムによって破壊された。彼女は、1942年に、息子のカールと共に、ナチに捕えられ、テレーゼンシュタット Thresenstadt に送られ、そこで数ヶ月の生活後、悪名高いアウシュヴィッツ強制収容所で、カールと共に、恐らくその年1942年に亡くなった。正確に言えば、殺されたのである。彼女もユダヤ人であった。

第二子 Peter Friedrich Hilferding 氏は、イングラントへ逃れ、その名 Hilferding を Milford と変え、戦後再びウィーンへ戻った。

マルガレーテは、1945年5月8日に亡くなった、とウィーン市庁には記入されている。これは、民法上の手続に過ぎず、彼女の悲劇的運命によるものである。彼女の明確な死亡年月日が不明なので、そのように取扱われたのであって、それ故彼女は、実際よりも法律の上で3年余計に生きていたことになっている。

### § 5. 彼の死について

彼の死んだ年は、1943年説と1941年説とがある。ヨーロッパの学界は、彼の伝記には、幾つかの誤りがあると看做し、死亡時期に関してはほとんど一致して1941年となっている。

日本における1943年説は、岡崎次郎訳『金融資本論』岩波文庫、1955-56年の解説。長坂氏論文。経済学事典(平凡社1969年版)等で採用されており、パリの監獄からブッヘンヴァルト強制収容所へ送られて殺されたとしている。この証拠と提唱者とは分らないが、人物を間違えた結果と思われる。

ルードルフと同じく、ナチに追われて、親友ルードルフ・ブライトシャイトは、ヒルファディングと共に亡命生活をする。彼等は、ナチによって捕えられ、パリの監獄に投げ込まれる。ルードルフ・ブライトシャイトだけが、ブッヘンヴァルト強制収容所へ送られ、

1943年に殺される。ブッヘンヴァルト強制収容所には、現在たしかにルードルフ・ブライトシャイトの記念碑がある。

ヒルファディングは、強制収容所へ送られるはずであったが、行かなかった。なぜなら彼は自殺したのである。亡命ドイツ社会民主党の機関紙 Neuen Vorwärts は、ナチズムの残虐さと強制収容所の状況について、多くの報道をしていた。ヒルファディングはそれを知りすぎる程知っていた。彼は、又、ユダヤ人である。彼が自殺を考えても不思議はない。

1941年9月17日に Berlin からの電報は、ヒルファディングが、彼の監獄の房で自殺をしたことを知らせた。

死因は、何であろうか、一説は、Kurt Kersten が言う、恐らく服毒自殺であろうというもので、他の説は、Mögner と Aufhäuser の説で、ヒルファディングは、ゲシュタポの訊問の後、窓から街路へ突き落とされたらしいというものである。

同じく亡命生活を共にしていたブライトシャイトの妻 Toni Breitscheid は、「ヒルファディングが、服毒自殺した、と信じる。」と話した、とピーター・ヒルファディング氏は筆者に告げた。亡命と逮捕の時期を通じて、生活を同じくしていた人の言葉は、状況判断からして最も可能性の強いものと思われる。そして、読者は、ルードルフ・ヒルファディングがウィーン大学卒の医学博士であることを、思いおこすであろう。

### § 6. (附録)

附録として、Amsterdam の社会史国際研究所のロシア部門所蔵のトロツキーの手紙と、Bad-Godesberg のフリードリヒ・エーベルト・シュティフトゥング所蔵のヒルファディングの手紙、の目録を掲げる。この内容については、今後、何らかの形で発表するつもりである。

#### 附録 1. レオン・トロツキーのヒルファディングあて手紙目録 (アムステルダム社会史国際研究所所蔵)

- 注(53) 現在はドイツ民主共和国にある。筆者は1972年に Buchenwald を訪れて、それを知った。  
 (54) Encyclopaedia Britannica, Vol. 11, 1963.  
 (55) W. Gottschalch 前掲書による。日本では、他に林要氏が「縊死」説を出されている。「1941年(昭和16年)9月17日、ヒットラーの占領下、フランスの刑務所で縊死体として発見された」(林要訳、「金融資本論」大月書店、1961年改訂版、2ページ)。筆者は、この説を否定する材料は持っていない。

- TH 1 パルプスとトロツキーからの手紙 [n. d.] 次から、全てトロツキー  
 TH 2 [1907年] 7月8日付, Leipzig  
 TH 3 [1907年8月] 31日付  
 TH 4 1907年 9月5日付, Niemes  
 TH 5 [1907年] 9月19日付, [Wien]  
 TH 6 [1907年12月], Hütelbergstr. 55, Wien XIII.  
 TH 7 [1908年] 2月27日付  
 TH 8 1908年 3月16日付  
 TH 9 1908年 3月24日付  
 TH10 [1908年] 4月30日付  
 TH11 [1908年6月はじめ]  
 TH12 [1908年6月]  
 TH13 [1908年] 7月21日付, Sieveringerst. 19, Wien XIX.  
 TH14 [1908年] 8月5日  
 TH15 [1909年6月20日より前] [1909年5月7日より後]  
 TH16 [1910年6月]  
 TH17(TH18)\* [1910年7月29日] Belgrad  
 TH18 (TH18A) [1910年7月25日] [Wien]  
 \* 丸括弧内は、手紙そのものの番号、無括弧は目録番号。なお上記二通は、日付の順は逆になっている。  
 TH19 [1911年9月20日] XIX/I Rodlergasse, 25 [Wien]?  
 TH20 [1911年10月から11月] XIII. Einsiedelgasse [Wien]?  
 TH21 [1912年1月又は1913年12月おわり] XIX Weinberggasse, 43 [Wien]?  
 TH22. [1912年10月はじめ]

#### 附録 2 ヒルファディングの手紙目録 (フリードリヒ・エーベルト・シュティフトゥング所蔵)

ドイツ連邦共和国の Bonn-Bad-Godesberg にある Forschungsinstitut der Friedrich Ebert Stiftung は、ドイツ社会民主党所属の研究機関である。その Bibliothek には、Partei Archiv があり、Rudolf Hilferding の手紙が保管されている。

以下は、同研究所の持つ彼の手紙の目録である。こ

れらは, Verzeichniss Ältere Nachlässe und Beständeから知ることができる。Rose Hilferdingの手紙も保管されているが、ここでは Rudolf のもののみをとり上げる。Nachlass類は種々に分類されており、その分類ごとに見てゆく必要がある。( )内は、カセット又は分類内の研究所ナンバー。

Nachlass Carl Giebel (Kassette I)

[13] 1929年2月1日付 Giebel あて手紙, Berlin W. 66, Wilhelmplatz 1. タイプライターによる。

Nachlass Hermann Müller

[38] 1928年7月19日付, ヘルマン・ミュラーあて手紙 (研究所は8月としている。)

[39] 8月29日付〔年号不明〕, ヘルマン・ミュラーあて手紙

[40] ヘルマン・ミュラーあて手紙, 年月日不明。

Aus dem Nachlaß von Dr. Max Quark

[50] 1925年10月5日付, クヴァルクあて手紙

Verschiedene Originalbriefe und Dokumente

[42] 1941年2月5日付手紙, ヨーク(?)あて。

以上6通である。しかし, R. Hilferdingに関するものとして, 次の2通がある, とされている。

Nachlass Dittman (Kassette II.)

[151] クララ・ツェトキンのディットマンあて, 1912年9月30日付手紙。

Aus dem Nachlaß von Dr. Max Quark

[50] ハイブリヒ・クローのマックス・クヴァルクあて, 1924年3月1日付手紙。

(補注) ヒルファディングの全著作目録として, 拙稿 Bibliographie über Rudolf Hilferding (日本社会事業大学研究紀要, 第20集所収) を参照願いたい。

(日本社会事業大学専任講師)

書 評

E・バウムガルテン著, 生松敬三訳

『マックス・ヴェーバー, 人と業績』

(Max Weber: Werk und Person. Dokumente ausgewählt und kommentiert von Eduard Baumgarten. 1964, Tübingen, Zur Interpretation von Werk und Person)

パウル・ホーニヒスハイム著, 大林信治訳

『マックス・ヴェーバーの思い出』

(Paul Honigsheim, On Max Weber, trans. Joan Rytina, ed. J. Allan Beegle and William H. Form. 1968, New York.)

安藤英治著

『ヴェーバー紀行』

ここにとりあげた3著は, 最近の Max Weber 研究のなかでも, きわめてユニークな個性的なものであり, また相互に共通する側面をもっていて, いやしくも Weber 研究に関心をもつ者であれば興味深いだけでなく, これらを読む者は誰しもある種の感動をうけるにちがいない。Weber 研究としては, 初歩的な段階にある筆者は, この3著をよんで, 批判などということではなく, いわば読後感ともいべきものを書きつづるにすぎないことをあらかじめおことわりしておこう。

最初の Baumgarten の著作は, 訳者の生松教授が, その「訳者あとがき」で書いておられるように, 歴大な E. Baumgarten の Max Weber 研究の第3部および年表を訳出したものである。そしてこの第3部は, 「第1部および第2部をふまえて, Baumgarten が, Weber の学問, 思想と人間的諸側面に加えた評訳である」といわれる (244—245頁)。そしてその内容は,

第1章 その業績の体系性と道具だて

第2章 伝記のためのいくつかの視点と資料

から成っており, 第1章においては, 史的唯物論をめぐるマルクスの批判とその継承の問題, 理念と利害におけるマルクスとニーチェとの関係, 官僚制とカリス

マの問題および社会科学の方法をめぐる問題がとりあげられ, 第2章においては, この世紀の巨人がその生涯にあらわれたさまざまな問題といかにとりくんだかが, 社会主義, 反ユダヤ主義, 国家, 権力などの諸状況, ならびに彼をとりまく友人と敵対者, 同僚たち, 近親者たち, Weber の病氣, 哲学, 運命と死などを通じて克明に語っている。最後の年表は, これらの諸問題を理解するのにきわめて有益である。Weber にも直接接し, 身近な人とも交友があっただけに Weber 理解は深く, 残された部分の邦訳が期待される。

ホーニヒスハイムの著作は,

\* マックス・ヴェーバーの思い出

\* マックス・ヴェーバー

\* 社会学者としてのマックス・ヴェーバー——記念のための言葉——

\* アメリカの精神生活におけるマックス・ヴェーバー

の4部から成っている。

この書物は, ミシガン州立大学社会学部の J. フラン・ビーグルおよびウィリアム・H・フォームの両氏が, その序に書いているように, ドイツからの政治的亡命者であった Honigsheim による Max Weber の回想であるが, たんなる個人的な思い出ではなく, Weber を中心に自然に出来上がったアカデミックなサークルや, 彼と交友のあった, あるいは敵対関係にさえあった人々との関係を中心とする回想であるところに特色がある。その領域は, ハイデルベルクを中心に, 経済学や政治学, 法学, 社会学, 民族学, 哲学や歴史そしてさらに芸術や宗教におよびまことに広はんな分野の人々との接触について記録し, そうした記録を通じて, Weber の人格および学問そのものを語っているのである。

安藤英治教授の「ヴェーバー紀行」は, 日本人としてはじめておこなった Max Weber の1864年, 生誕から, 1920年その死に至るまでの生涯について, この偉大な学者にゆかりの地の訪問および親しく接した人々にたいするインタビューの記録である。読者は, 本書によって何よりも Weber にたいする著者安藤氏の理解の深さと敬慕を読みとることができる。

I プロローグ

II 東独のヴェーバー

III ヴェーバー成年に達す

IV 苦悩のパンシカ

V アルト・ハイデルベルク

VI 戦争・革命・ヴェーバー